

はじめに

自閉症スペクトラム児を対象に療育プログラム開発に取り組みはじめたのは、2003年度からである。プロジェクト開始に先立ち、2001年から2年間の応用人間科学研究科附属心理・教育相談センターでのプレイセラピーが準備期としてある（5章参照）。以来、15年余の歩みを重ねてきたことになる。

私たちの研究グループは、参加してきてくださっている当事者およびその親のみなさんのニーズと期待をもとに、応用人間科学研究科修士課程、社会学研究科博士課程後期課程等の院生のみなさんおよびサポーターの先生方、当事者のみなさんの参加と協力ですすめられている。きょうだいグループには、文学部・産業社会学部・政策科学部の学部生のみなさんも参加してくれている。

私たちの活動は、月1回の活動である。「たかが月1回の活動ではあるが、されど月1回の活動に！」を合い言葉に続けられている。何よりも大切にしていることは、「楽しい活動」「意味のある活動」「思い出にのこる活動」「また参加してみたいくなる活動」である。活動プログラムは、この15年間に蓄積されてきたノウハウの土台は、フレームをもとにしつつも参加院生の創意・工夫を採り入れた創造性のあるものとなるように、継承・修正・創造のサイクルを大切にしていっていることにある。1回の活動を準備するのに約1ヶ月間が当てられる。院生の人たちの準備に費やすエネルギーは相当なものである。準備にエネルギーを費やしたからプログラムが成功するとは限らない、子どもたちにうまく受け入れられない時もあるし、プログラムに抵抗感がない場合もある。また、年間スケジュールを見通してプログラムの連続性を念頭においてプログラム開発をすすめなければならない。

本冊子は、上記の初年から取り組んできた活動をまとめた私たちの3年間の歩みの記録であり、努力の結晶である。プログラム内容については、みなさんから忌憚のないご意見やご批判をいただいてさらに質の高いものへと発展させていかなければならないと考えている。

私たち研究グループは、2013年度からは文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学＝実〉連環型研究」

プロジェクト内「社会的包摂に向けた伴走的支援の研究」チームに参加して活動を展開してきた。本冊子では、療育プログラム開発の実際をまとめているが、その対象期間は2013年4月から2015年10月までの2年7ヶ月である。この3年間、活動の成果を日本発達心理学会年次大会、日本自閉症スペクトラム学会各年次研究大会、対人援助学会各年次大会、人間科学研究所各年次総会等で発表してきた。

本研究を支えてくださっている大学内外の関係者のみなさんのご指導とご協力、ご支援に対して心から感謝とお礼を申し上げます。特に、毎月参加してくれている子どもたちと親のみなさんには、深い感謝と共に、私たちの活動への理解と信頼を寄せてくださっていることを糧に、さらに努力を重ねていくことをお約束したい。関係者のみなさんのお力添えがなければ私たちの研究は継続してこなかったであろう。

2016年2月14日 2月期の活動日に、子どもたちの声を聴きながら

執筆者を代表して、荒木穂積・竹内謙彰